65

# 新出の西村流『家伝鍼灸秘録』について

加畑　聡子，星野　卓之，小田口　浩，花輪　壽彦
北里大学東洋医学総合研究所

**【はじめに】**

西村玄春（1620–1698，名は維宣，後に元春，玄春と称す.）は，1653年に守山藩医を務めた後，1675年に水戸藩医として徳川光圀に仕えた鍼医で，獅子流または四支流とも称される西村流の祖とされている．その事績については，『桃源遺事』（1701年成）に，「獅子の針」を用いる「扁鵲流の御針医」として，その鍼術を光圀から称賛されたことが記録されている．その内容は，『西村元春先生没後三百年記念式典記念誌』（西村元春先生没後三百年記念式典実行委員会，1998年刊）を始め数々の先行研究にて，『鍼灸秘録』に収められているとされてきたが，皇漢医書伝写会刊行の油印本（1938年刊）が唯一の伝本とされ，原本の内容は明らかにされてこなかった．そこで今回，新たに西村玄春の著作と見られる『家伝鍼灸秘録』（写本1冊・保宝彌一郎旧蔵本，北里大学東洋医学総合研究所所蔵）が見出されたので，その内容を検証し，報告する．

**【結果及び考察】**

本書の首には書名『家伝鍼灸秘録』と共に，自序，「伝授目録」，本文に大別され，末には書写者と見られる「茨城県下常陸国東茨城郡上市南町……」に居住した関口元泉の名が記され，地名から明治期以降の書写であることが示唆される．

本書の首にある自序は，『霊枢』邪気蔵府病形篇，『標幽賦』，『十四経発揮』宋濂序，『神応経』劉瑾序からの引用文を基軸として構成され，自序の末に見える「独り平安の人，意春澤田氏なる者，乃ち宏綱陳先生なる者の授けらるる所の術に遇ふなり．其の補瀉及び四支の妙載す．以て不朽に備へ，謹んで澤田氏の術を継ぎて墜とすこと無く，子々孫々秘宝とす．承応三年甲午春二月西村元春維宣謹識.」の記載から，宏綱陳（明・陳会）撰『神応経』の影響を受けた澤田意春の学を継いだこと，一子相伝であること，1654年に成ったことがわかる．

「伝授目録」には，西村流の伝授項目と見られる「四支之鍼法」「四支之刺法」「補瀉之刺法」「三気三邪之事」「呼吸之事」「経絡之法」「刺法十条（「催気刺」「転刺」「半刺」，「豹文刺」，「関刺」，「合谷刺」，「輸刺」，「四肢刺」）が記されている．うち「四支之鍼法」「四支之刺法」「補瀉之刺法」を口伝とし，「四支之鍼法」の後に「別巻筐中に蔵して秘す.」，「経絡之法」の後に「以上の六許，別に具す.」と記されることから，免許皆伝にあたっては，本書以外の教材や手法が用いられていたと推察される．

本文には，「黄帝鍼経抜粋」，歌賦，「百病刺法要治」「諸証八要穴」，病門別の選穴，「経穴別名」「奇穴名目」「鍼灸経験方別穴」「通例灸穴」「西村流鍼術盟約之文」「通関之穴」「同名穴」「穴名同異」「虚里之動」「井栄兪経合」「五臓六腑井榮兪経合主治刺法」の項目が見られ，『素問』『霊枢』『傷寒論』『難経』『類経』『類経図翼』『医経小学』『神応経』『活人書』『千金方』『鍼灸大全』『医学入門』『寿世保元』『鍼灸摘英集』等，明代を中心とした古医書の記載が多く引用されている．選穴においては，各病門および付随する症状ごとに主治となる経穴名が記されている．また，散見する未整理の段落書式は，本書が刊行を目的とした草稿ではないことを示唆している．

**【結語】**

以上のことから，本書は，『素問』『霊枢』ならびに明代の諸書の引用を基軸とする西村流が依拠する学が表された，秘伝的な書と位置付けられる．また，収録される「伝授目録」の記載を勘案すれば，学においては中国古典の記載を尊重しつつも，術においては秘伝的かつ実践的に継承する，江戸前期の鍼灸術伝授の態様を示す好例と言えよう．

※『西村流家傳鍼灸秘録』原文の誤字は，私見によって改めた．

本研究は，平成29年度武田科学振興財団杏雨書屋研究奨励「江戸時代医学公教育形成と実証性に関する基礎的研究」，JSPS科研費JP20K129053Dの助成を受けたものである．